# アヴェ・マリアを巡って

**中世ルネサンスの昔から、アヴェ・マリアは多くの作曲家の心を捉えてきました。新約聖書の「ルカによる福音書」の「受胎告知」とそれに続く言葉を中心に編まれたアヴェ・マリアは、カトリック教会の聖母信仰とともに大きな広がりを見せ、多くの名曲を生み出してきたのです。**

**本日はそのキラ星の如き作品群の中から、ほんの一握りの曲たちを、関連する作品とともにお届けいたします。**

## ●フェリックス・メンデルスゾーンの「アヴェ・マリア」他

メンデルスゾーンは1809年にハンブルクでユダヤ人銀行家の家庭に生まれました。早くから音楽の才能を示し、幼少の頃からパリやベルリンで音楽の教育を受けました。20歳のときに、当時はすっかり忘れ去られていたバッハの「マタイ受難曲」の再演を（バッハの死後初めて）行い、それがバッハの再評価に繋がって現在にまで至っていることは有名です。本日のプログラムの作品23「三つの宗教合唱曲」は、そのマタイ受難曲再演の翌年に作曲された作品です。なんと21歳の時の作品なのです。本日は全体を「アヴェ・マリア」でまとめるためもあって曲順を入れ替えていますが、本来の順番は「Mitten wir im Leben sind（私達は生のただなかにあって）」「Ave Maria」「Aus tiefer Not schrei ich zu dir（深き淵より）」となっています。

この作品は彼がローマに旅してバチカンを訪れた頃に作曲されています。多感な二十歳そこそこの青年が大聖堂に響き渡るイタリアの教会音楽に心奪われたとて不思議ではありません。何世紀にも渡ってイタリアは、芸術の泉だったのですから。かつてハインリヒ・シュッツ（バッハのちょうど百年前の大先輩）もイタリアに旅してイタリア風の曲集を作りましたし、バッハもイタリアの作品を研究してかなり強い影響を受けていますし、モーツァルトもたしか3回くらいイタリアに旅行をしたものです。

しかしバッハには「アヴェ・マリア」という作品はありません。アヴェ・マリアといえばカトリックの曲です。「聖母信仰」はプロテスタントでは重視されませんから、アヴェ・マリアは作曲も演奏もされないのです。ではバッハと同じくプロテスタントの一家に育ち、バッハの研究者、指揮者としても名を上げた若き俊英メンデルスゾーンが、ルターに由来する重々しいドイツ語の二曲の間に、なぜ「アヴェ・マリア」を挟んだのでしょうか。それはイタリアの空気のなせる業だったのでしょうか？

本日はメンデルスゾーンの合唱曲としてもう一曲、「Hör mein Bitten（わが祈りを聞きたまえ）」も演奏いたします。彼の宗教合唱曲としてはもっとも知られている名曲です。作曲は1844年、彼が資金集めに奔走して自ら「ライプツィヒ音楽院」を開いて院長となった頃です。38歳でのあまりに早すぎる死の、3年前の作品です。

## ●ヨハン・ミヒャエル・ハイドン

1737年生まれ，1806に没したオーストリアの作曲家。というよりフランツ・ヨゼフ・ハイドンの弟と言ったほうが早いかもしれません。彼が活躍したザルツブルクは、モーツァルトも住んでいたカトリックの街ですから、